



きれいごと抜きの対人援助術—カスガ先生、この「詰んだ」状況どうすればいいですか？—

春日武彦 著
中央法規出版
2026年5月 208頁
本体価格 1,800円+税

春日武彦氏の著作は多い。評者の推しは『援助者必携 はじめての精神科』である。なぜなら、私事ながら福祉、心理、看護領域のコメディカル養成を重要な職務として22年余りになるところ、駆け出しの2004年4月に時を同じく刊行された同書（初版）に出会えて、大いに心強かったからである。初版の帯にある「こんなこと、誰も教えてくれなかった！」は、現3版（2020年4月）もそのままである。帯の言葉に偽りはない（まさに実感である）。

『きれいごと抜きの対人援助術』（以下、本書）の帯にもまた、「この本に早く出会っていれば、無駄に傷つくことや悔しい思いは減っていた」とある。どちらの書も、もはやした臨床経験を整理してくれることうけあいで、相応に齢を重ねてなお気付きをもたらしてくれる。さて、タイトルの「きれいごと抜き」を皮切りに、本書には『「正論」だけで現場は生き抜けない』（カバーの前袖）、「話を通じなくても、罵倒されても、仕事は続く」（帯）、「援助者は、絶句したまま棒立ちになっているわけにはいかない」（おわりに）など、対人援助者に向けたエールが随所に散りばめられ、表紙をめくらずにはいられない。

本書は「カスガ先生」が、現場で奮闘する「トリイさん」へアドバイスする形で進む。章立ては「援助はどこからスタートするか」に始まり、「クレーマー」「共依存」「家族」「難しいケース」といった流れで続く。疾患による区分ではなく問題点を切り口とすることで、目の前にいる人やその家族の全体像を実践的に捉えようとする姿勢がうかがえる（事例では診断名も記される）。初診時はもちろん、地域でのアウトリーチなど病名がない（そもそも病気かどうか分からない）とき、あっても対応の焦点は別に認められそうなとき、パーソナリティ（クレーマー）や人と人のつな

がり（共依存）などからケースの把握を試みるのは（医師よりむしろ）コメディカルの得手とするところであろう。

そして春日氏は「都内に3ヵ所ある精神保健福祉センターすべてで仕事をし」「病院に閉じこもっているだけでは想像もつかなかったようなシチュエーションや問題と向き合うことができ」「医療職以外の関係者がどのように考えたり振る舞うのかを目の当たりにできた」（おわりに）という。かように質量とも厚みのある、場所や職種を超えた知見のエッセンスが軽妙な語り口により本書で明かされるとき、まこと対等なコメディカルとの多職種協働の中にいるごとき感覚が湧き上がってくる。これを春日氏はまさに具現化してきたに違いない。

思わず膝を打ったいくつかを挙げてみる（ページ順）。「ためらったという事実は、むしろ電話だからこそ相手に悟られてしまう」（電話対応）、「何か提案するときには、損得勘定」（統合失調症）、「お互いに嘆き合う関係性にもっていける可能性」（境界性パーソナリティ障害）、「『相談を試みたが、結局解決がつかなかった』という…現状維持のアリバイ作り」（共依存）、「『家の中の空気の緊張感』を仲立ちに悪循環が生じていた」（認知症）、「時間の流れが止まっている。だから、ことさら楽しみがなくても平気」（引きこもり）、「現在の状態を贖罪としてあえて受け入れたいと思っていた」（高齢者虐待）、「責任が分散されるというのはきわめて重要」（ケース会議）、「耐えきれなくなるのは、結局のところ自分自身を信用しきれなくなるから」（クレーマー）等々。いずれも短く抜き出して恐縮である。ぜひ実際に目を通していただきたい。

あらためて帯を見ると「ちょっと毒入り」「口は悪いが役に立つ」（『援助者必携 はじめての精神科』）、「皮肉と親愛を込めて」（本書）といった字句が躍っている。やはり言葉に偽りはない（まさに良薬である）。いわば、本書にはあらゆる対人援助者が備えるべき——決して魔法の解決法ではない——実践態度が示されているのであって、これは時間を敵に回して診断や治療へ指示的にはやるわれわれにとり、チームの中で注意深く補われてよい姿勢かもしれない。時間を味方につける支持的な態度、とでもいえようか。そうした意味で本書は職種を問わず薦められるが、実のところ医師にこそ、老若ともども手に取るべき一冊に数えられるであろう。

（大西次郎）